20200913レムナント教会1部

**絶対福音(Ⅱサムエル記10:1-5、19)**

 ダビデが、隣の国アモンの王が死んだということを聞き、以前、よくしてもらったことがあるので、弔問のためにお悔やみの使者を送ります。恩返しという意味もそこにはあったと思います。しかし、その息子が代わって王になりましたが、家来たちが「ダビデがそういう純粋の思いで人をやるはずがありません。これは偵察として来て、結局、私たちの国を亡ぼすための計略ではありませんか」と訴えたわけです。それを聞いて息子の王が、ダビデの使いたちのひげを半分切り落としてしまいます。これはひどい侮辱なのです。そして、衣をお尻が見えるまで切り落として送り返したと書いてあります。ダビデの使いたち、つまり、ダビデとイスラエルを侮辱したということでしょう。そこでアモンの王は、たぶんダビデが怒って仕返しに来るだろうと予想して、よその国アラムに援軍を要請することになりました。それで連合軍を作って戦争に備え、むしろ戦争を仕掛けようとしたわけです。ダビデとイスラエルを拒否して侮辱しただけではなく、そのイスラエルを攻撃しようとまでしていたということでしょう。それを聞いてダビデは、これは許すことができない、容認できないと思い、兵隊を集めて、結局そのアモンという国を制覇し、また一緒に加わっていたアラムという国も大きなダメージを受けることになりました。それで最後の19節には、アラムがその様子を見て、そこから手を引いてダビデと和解したとあります。ダビデを拒否してイスラエルと敵対していたものが、むしろ和解を図るようになったということが今日の聖書の箇所の内容です。

　ダビデとイスラエルというのは、単なる国、単なる王とは違います。前にも何回も申し上げました通りに、ダビデはキリストを象徴する者であり、イスラエルは契約の民、つまり、神の契約の象徴のようなものです。契約というのは、キリストによって罪人の人間が救われるという福音を表すものでしょう。なので単にダビデが侮辱されプライドが傷ついたので仕返しをしたという単純な話ではありません。アモンというの国は、ダビデの良い思い、恩返しのような、ある意味、恵みを与えようとしていたことに対して、そのダビデを拒否しました。福音を拒否しただけに留まらず、福音に攻撃をしてきたということによって、最終的には完全に滅びてしまったということです。この出来事を通して今の私たちに語られるメッセージはこういうものになります。福音を拒否するとそれ以上希望はありません。なぜかと言いますと、福音はあってもなくてもいいような、また選択の内容ではなくて、福音は絶対的希望であるからです。福音というものはどういうことでも、どのような理論があっても譲ることができないし、妥協不可能なものです。福音は最後の最後の希望です。福音が絶対的な希望だということを、今を生きるクリスチャンの私たちが正しく理解して確認していかないといけません。今日はこの礼拝を通してそのことを改めて確認し、皆さんの心に刻み込んでいただく幸いなときにしていきたいと願います。

　今この世は、実は勘違いの中を生きています。どのような勘違いなのかと言いますと、人が一生懸命、頑張れば、人がその頑張りによる努力をすれば希望の光が見えると、人の頑張りに希望を見ようとしています。しかし、良いお話でしょうけれども、実際に99％の人たちは努力もできないどころか、途中で努力や頑張りなどが続かないのです。限界にぶつかるのが現実です。その中で一握りのわずかな人たちがその努力を続けることによって結果を見ることがあります。それで努力は報われると大きな声で叫びます。それは間違いないでしょうけれども、しかし、その結果がまことの幸せと結びつくわけではありません。ですから、一握りのわずかな人たちが一生懸命、意地を張って努力して結果は見たのにもかかわらず、重荷を負うようになり疲れてしまいます。これが正直な現実というものです。それなのにこの世は、頑張ればそこに希望があるだろうと勘違いの中を生きています。

　それから、もう一つの勘違いは、経済的に裕福になり豊かになればそこに希望があるだろうと思うのです。しかし、正直な現実、99％の人たちは思い通りに金持ちなどになれません。金持ちとは縁の遠い人が99％なのです。その中で一握りのわずかな人たちが富を手に入れる場合があります。それで一瞬、喜んでいるでしょうけれども、その富、金持ちというのもまことの幸せに結びつくものではないということに気づくようになるのです。それで頭が混乱してしまいます。手に入れたお金、富をもって暴れるわけです。それが幸せではないので。それなのにいまだに富によって幸せになるだろうという勘違いの中をこの世は生きています。

　それから、もう一つの勘違いが、成功すれば成功の中に希望があるだろうと思い、成功に希望を見ようとしていますが、これも同じです。99％の人たちは、成功したいけれども成功とは程遠い人生を送っているのではないでしょうか。その中で一握りの人たちが成功を手に入れるようになります。しかし、その成功がまことの幸せと結びつくことではないということに気づくようになり、言葉に言い表すことができない虚無感に陥ることになります。これは薬がありません。これが正直な現実ではないでしょうか。それにもかかわらず、世の中の人々はこのような勘違いの中を生きています。限界を見て、頑張りたいと思うけれども思い通りにいかないし、金持ちになりたくても成功したくても願い通りにならない人々は、その願いを叶えるために偶像崇拝に走り、占いに頼り、宗教などを求めるようになります。それから、一握りの人たちが頑張ってその結果を手に入れて、富を成功を手に入れたにもかかわらず、そこからは見当たらない幸せ（本物が何かわからないでしょうけれども）、そこで得ることができなかったものを手に入れようとして、同じく偶像崇拝に溺れ、また偶像を拝み、占いに走り、宗教を求めたりしてしまいます。しかし、それは暗やみの力によって操られていることですから、より大きな霊的な困難に陥るだけのものです。

　その結果、一生懸命、頑張って金持ちになろうと、成功しようと思うのにも関わらず、霊的な問題はずっと続くわけです。精神的に患い、肉体的に様々な病を患うようになり、そして、人間関係が崩壊して家庭が破壊され、社会も崩壊していくようになります。これが歴史の繰り返しです。それから事故が相次いで、災難が絶えないし、戦争もずっと続く時代、世界を生きるしかありません。これが歴史を通してずっと続いているのにも関わらず、反省することができないまま、勘違いの中をずっと生きている状況です。なぜそのような勘違いから中々抜けられないのでしょうか。なぜその勘違いの中に捕らわれて騙されて、結局疲れて空しい人生を送っているのでしょうか。それは自分の知識や知恵などでは絶対知ることができない人間の根本的な絶望が何か分かっていないからです。聖書の他には教えられません。エペソ2：1-3に記されています。根本的に自分の罪過と罪との中にあって死んだ者であり、神様と縁が切れて、いのちが絶たれ、根本的にたましいが死んだ状態です。それが何を意味するかというと、目に見えない空中の権威を持つ支配者、悪魔、サタンに支配される人生になりました。ですから、生まれながら神の御怒りを受けるべき存在として生まれ、最終的には地獄に行くしかありません。これを一言でヨハネ8：44には「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって」とあります。これがすべての人間の根本の状態です。根本がこういう問題を抱えているのに、これをクリアしないまま頑張ればそこに希望があるのでしょうか。この根本を抱えているまま、金持ちになるからといって、そこに希望などがあるのでしょうか。ある人は、親が変な親なので、私の人生はこんなに曲がってしまったという人がいますが、根本的にこのような霊的な問題を抱えているまま、優しい親だからといって人生に希望があるのでしょうか。これが勘違いなのです。残念なのは、クリスチャンの私たちも同じ勘違いから中々のがれることができないということです。人の根本的な、しかも絶望的な状態、聖書の他には教えられない、神の恵みをいただいている者のみに分かるこのことが分かっていない限りは人は勘違いのままの人生を送るしかありません。旦那さんが、奥さんがと、誰かのせいにして、社会が、政治がと言う。噓ではありませんけれども、根本的な状態がそのままで、政治が変われば何かが変わるのでしょうか。その人の人生が本当に幸せなものになるのでしょうか。悪魔、サタンというものは偽りの父と呼ばれるものであって、人間をこのような勘違い、偽りの中にずっと閉じ込めて自分の思うがままに操ろうとしているものです。ですから、人類にとって、この世の中の希望というものは、最初からこの根本問題に対しての答えであるキリスト一人しか希望はありません。このキリストを通して与えられるまことの救い、そこにのみ希望があるわけです。ですから、神様は最初から創世記3：15、女の子孫が生まれて、蛇の頭を踏み砕くとおっしゃいました。そこにのみまことの希望があるわけです。これを福音と言います。つまり、キリスト・イエスの福音というのは、唯一の希望であり、最後の希望です。今日の聖書の箇所は、そういうことを表すものであって、ただ仕返しのような話ではありません。キリスト・イエスの福音は、唯一の希望であり、最後のターミナルコースです。

　なぜかと言いますと、キリストだけが悪魔、サタンを打ち壊すことができるまことの王様であり、キリストだけが神様と出会う道、いのちの預言者であり、キリストだけが罪とのろいをなくすことができるまことの祭司だからです。キリスト・イエスの福音が唯一の希望であり、最後の希望です。ヨハネ14：6、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。キリスト・イエスだけが道であり、真理であり、いのちなのです。使徒4：12、「世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」。キリスト・イエスの福音だけが唯一の救いの道です。キリスト・イエスだけが、すべて疲れて、重荷を負っている人間が、その重荷を下ろすことができるまことの安らぎ、答えです。唯一、しかも最後の希望です。イエス様がヨハネ7：37でこのようにおっしゃいました。「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」。人生の飢え渇きを潤して、それを満たすことができるいのちの泉が湧きおこるようにできる道はイエス・キリストのほかにはありません。飢え渇きの人生を満たすことができるのは、キリスト・イエスだけです。人は死と罪の原理に捕らわれて、つまり滅びる運命に捕らわれて、人間の力ではどうしようもないのです。イエス・キリストだけがその死と罪の原理から解放される唯一の道、最後の希望なのです。

　ですから、イエス・キリストを信じる人は、使徒3：20で言われているように、まことの回復のときが来ます。韓国の訳では愉快な日が来る、人生愉快な日を迎えるのはイエス・キリストのほかにはありません。雨の日が晴れるから愉快な日になるわけではありません。宝くじに当たるから愉快な日になるわけではありません。人生の根本的な絶望に目覚めていただきたいと思います。そこからスタートしない限りは話がちんぷんかんぷんになって何もかもつながらないのです。なぜ教会に行くべきなのか、なぜイエス様を信じるべきなのか。聖書にはローマ10：13「「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」と宣言されています。キリスト・イエスの福音は唯一、かつ最後の希望です。これを絶対福音と言います。譲るものがあり、譲ってはいけないものがあります。この区別がつかない場合には、信仰生活に勝利することは中々難しいでしょう。聖書は迷うことなく明確にすべてを譲りなさい。寛容でありなさい。しかし、キリスト・イエスの福音は絶対妥協などは許されません。キリスト・イエスの福音を拒否すると、次にまた第二の希望などが待っているかのような、そういうことはありません。それを今日の聖書を通して改めて確認して感謝の賛美を捧げていただきたいと思います。そのイエス・キリストによって誰でもキリスト・イエスを信じる者は、マタイ5：3にあるように、その人の内側に天の御国を所有することになります。それでもう終わりではないでしょうか。それで十分なのです。コロサイ2：2-3に、キリストの中には、すべての知恵と知識の宝が隠されているとあります。すべての知恵と知識の宝を得るようになり、エペソ1：3、「天にあるすべての霊的祝福」をいただくようになります。つまり、イエス・キリストの福音は十分でそれで終わりなのです。それ以上もそれ以下も何もありません。イエス・キリストの福音は、唯一の希望であり、最後の希望なのです。だから、サタンは必死になって、怖くて怖くてしょうがなくて、このイエス・キリストの福音を聞くことができないように必死になって邪魔するのです。しかし、神様に勝てないので神の恵みのうちにある人々がこのイエス・キリストの福音を聞くようになります。聞いたら、信じられないようにまた邪魔します。過去の経験や知識や今までの価値観や自分の欲望や様々な傷やいろいろなことを取り上げて、とにかくこの福音を唯一の希望、絶対的な希望、最後の希望として信じることができないように妨げます。そして、イエス・キリストの福音を信じた者は、その福音を傷つけて、福音が唯一、最後の絶対的な希望にならないように、何かのものと妥協させようとします。これが教会が気をつけないといけないものです。信者が気をつけないといけないものです。イエス・キリストの福音と言いながら、プラスアルファがいつもそこに一緒に浮かび上がるわけです。それは悪魔の策略です。勉強が足りなくても構いません。社会的な地位がなくても、能力が足りなくても、イエス・キリストの福音は唯一の希望、最後の希望、絶対的な福音なのだということを確認し、皆さんの心に刻むようにしていきましょう。

　ですから、今日のこのメッセージをしっかり握ってください。福音を拒否すればそれ以上希望はありません。福音は絶対希望です。そうならば、まず自分の内側で「このイエス・キリストの福音が絶対希望です」と告白するところから始めましょう。それを繰り返し、繰り返し告白していきましょう。「イエス・キリストの福音は絶対的な希望なのだ。なので妥協することも譲ることもできない。自分の信仰はイエス・キリストのオンリーであり、イエス・キリストで十分なのだ」と。自分の信仰はどういうものなのか、信仰のカラーは何なのかということを吟味して、それを固めていくようにしましょう。そうすると、パウロのようにこういう告白に至るようになります。「今まで誇りに思っていたもの、今まで希望にしていたもの、頼りにしていたもの、今まで引っかかっていたもの、良いものでも悪いものでもすべてをちりあくたです」と告白するようになります。これがイエス・キリストの福音が絶対福音だという告白の結果です。そして、自分の自我が要りません。自我が邪魔です。自分の今までの願いというものがあったでしょう。「子どもがこうなってほしい」「金持ちの家庭になりたい」「健康になりたい」などいろいろな願いがありましたが、その願いはいらないものであるし、むしろ足を引っ張るものなのだね。自我を下ろして、自分の願いは全部捨てます。自我ではなくてイエスの御名によって生きていくようになるし、自分の願いではなくて神の願いを願いにして祈るようになります。どうすれば頑張れるか、どうすれば金持ちになれるか、どうすれば成功するか。それはもはや私たちのものではありません。なので自分の中で信仰のカラーが、自分が今受けて持っている福音が、イエス・キリストの福音の色が、どんな色なのかということを吟味して正して固めて行くようにしましょう。

それで信者の内側に、自分の内側に、このような絶対福音をくらませるもの、忘れさせるもの、そして、遠ざけるもの、この福音の他に違う何かを頼らせるものなどがあると、そのたびに徹底的に排除していきましょう。特に、誰かのせい、何かのせいにしたり、言い訳に走ること、それはその人の色の中では一理ある話でしょうけれども、よくよく考えて裏返して見ますと、福音の他に違う何かを頼りにしていたという裏返しではないでしょうか。だから、誰かのせい、何かのせいにしてしまうのでしょう。そういう部分を正していくようにしましょう。何かのせい、誰かのせいなどありません。それは自分が福音、キリスト・イエスだけに希望があるではなくて、そう言いつつも違う何かを頼りにしているから、そこがふらふらするので不安になり、何かの、誰かのせいにしていることなのです。そういう部分をよく吟味して、自分の中で福音が絶対希望としてしっかりと根を下ろすことができるようにしていきましょう。

　それから、そうすることによって、今自分が持っている福音、神様から恵みによって自分の内側に与えられているこの永遠のいのちの福音、これが未信者の運命を左右する唯一、かつ最後の希望なのだという確信と感謝と自負を持って、皆さんと関わっている人々の伝道のための祈りを堂々と始めて、しかもあきらめずに続けていただきたいと願います。彼らの希望は社会福祉制度ではありません。Go Toトラベルが東京でなるかならないかが希望ではなくて、皆さんの内側に彼らの希望があるのです。イエス・キリストの福音こそ希望なのです。冒頭で申し上げましたように、クリスチャンがこの信仰の色を持たないと、クリスチャンでも勘違いの中を生きるわけです。誰かのせい、何かのせい、ずっと昔の傷に捕らわれて、また変な目標を定めて、成功は目標ではありません。私たちの目標は人のいのちを生かす福音宣教のほかにはありません。ダビデが侮辱されたことによってただ腹を立ててお返しをしたわけではなくて、福音を拒否するということはあってはいけない、それはもう絶望なのだというメッセージなのです。福音はそういうものなのだということを改めて皆さんの内側で感謝と賛美があふれるようになることを祈りたいと思います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。ありがとうございます。罪人であり、絶望の中にいて地獄の運命に捕らわれていた私たちに一方的な恵みによって、イエス・キリストの血潮によって、いのちを与えてくださり、キリスト・イエスこそがまことの希望であり、唯一、かつ最後の希望である絶対希望であることを教えてくださりありがとうございます。自分の福音がどのようなものなのかを吟味して固めて、未信者の希望が自分の内側にあるイエス・キリストの福音だという確信と自負を持って、残りの生涯を伝道のために生きることができるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。